

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	2019年春季例会報告
Author(s)	青木, 利夫; 亀口, まか
Citation	『通信』Ⅱ, 6 : 6 - 9
Issue Date	2021-02
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051090">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051090</a>
Right	
Relation	



## 2019年春季例会報告

2019年5月11日(土)に青山学院大学渋谷キャンパス(総研ビル8階 第11会議室)にて、2019年春季例会が開催されました。

第一部は、ナショナリズム部会セッションが、倉石一郎氏(京都大学)の司会のもと行われました。最初に岡田泰平氏(東京大学)が「植民地教育と「近代」-二つのナショナルヒストリーと越境史の視点から」というテーマで報告され、呉永鎬氏(世界人権問題研究センター)からコメントをいただきました。続いて、村田遼平氏(千葉大学大学院)が「清末中国における救貧と「教化」-北京の善堂を事例として」というテーマで報告され、山田美香氏(名古屋市立大学)からコメントをいただきました。

第二部では、大門正克氏(早稲田大学)の講演会「私の研究を振り返る-自問と同時代史的な検証を通して-」が岩下誠氏(青山学院大学)の司会のもと行われました。コメンテータとして小林正泰氏(共立女子大学)と三時眞貴子氏(広島大学)が登壇されました。

この詳細は、以下の報告をご参照ください。

### 「ナショナリズム部会」セッション参加記

青木利夫(広島大学)

2019年5月11日(土)、青山学院大学においておこなわれた春期例会では、第1部として「ナショナリズム部会セッション」が開かれた。このセッションでは、岡田泰平氏(東京大学)と村田遼平氏(千葉大学大学院)の2名が報告をおこない、呉永鎬氏(世界人権問題研究センター)が岡田報告に対し、また、山田美香氏(名古屋市立大学)が村田報告に対してそれぞれコメントをした。

岡田氏は、米国による植民地支配下のフィリピンの教育に関する著作をすでに出しているが、本例会では、「植民地教育と『近代』-二つのナショナルヒストリーと越境史の視点から」と題して、19世末のスペインによる植民地支配下での教育に関する報告をおこなった。とくに、スペイン在住のフィリピン出身知識人たちが創刊した『ラ・ソリダリダッド(La Solidaridad)』という機関誌を史料として、彼らが目指すフィリピンの改革(「近代化」)について分析した。わたしは、フィリピン同様スペインによって植民地支配を受けたメキシコの近現代史を専門とするが、今回の報告は、フィリピンがヌエバ・エスパーニャ副王領(現在のメキシコ)の一部でもあったということを改めて想起させるものであった。そして、同じスペインの植民地であった両国の教育をめぐる比較史という観点からも、この報告を非常に興味深く拝聴した。

『ラ・ソリダリダッド』にかかわるフィリピン知識人は、スペイン議会への代表権や言論の自由などは強く要求するものの独立までは求めていなかった。1810年に独立戦争が開始され1821年に独立を達成したメキシコにおいても、スペインからの離脱に反対する知識人は多く、独立から100年後の1921年に初代教育大臣に就任した人物でさえも、メキシコのスペインからの独立は間違いであったという歴史認識を抱いていた。植民地支配によって「文明」がもたらされたと被支配者が考えるようになることの問題性、すなわち「恩恵の論理」の解明は、植民地研究の重要な課題であることが岡田報告を通じて再確認された。

フィリピン、メキシコ両国の近代化におけるもうひとつの課題として、多言語多文化社会の「国民統合」の問題があるだろう。独立後もまなく再び米国の支配を受けるフィリピンとは異なり、メキシコは1821年の独立以後、ヨーロッパを模範としつつも独自の近代化を模索してきた。とくに、多様な言語と文化を有する多くの先住民をいかに「メキシコ国民」とするか、そして都市白人層の社会から「遅れて」いる先住民社会をいかに「文明化」するかが、独立以降、メキシコ支配層の課題のひとつであった。19世紀後半から20世紀にかけて都市部から農村部へと公教育制度が拡大していくなかで、スペイン語化およびその識字を中心とする教育はそのための重要な手段とされた。フィリピンの知識人も、多言語多文化社会であるフィリピンの「無知なる大衆」のスペイン語化による「文明化」という点においては、メキシコの知識人層と同様の意識を共有していたのであろうか。

ただし、フィリピンはその後、米国の植民地支配を受けることとなり、メキシコとは大きく状況が異なる。言語や宗教や統治のしくみなどが異なる国による宗主国の交代は、一見するとフィリピンに断絶をもたらすように思えるが、その前後の時代を切り離すのではなく、つながりとしてみていくという岡田氏の視点は大変重要であると思われる。また、植民地支配は世界の多くの地域に共通する歴史であり、現在まで続く植民地近代の問題につながることから、コメンテイタの呉氏が指摘するように、時間や空間など植民地研究の視点を広げていくことの意味を考えることが必要であろう。

次の村田報告では、「清末中国における救貧と『教化』-北京の善堂を事例として」という題目で、清朝末期の北京における救貧事業の変遷とそれがもつ「教化」の内実の変容について論じられた。とくに19世紀末から20世紀にかけて、救貧事業が、社会秩序の維持に加えて、職人あるいは労働者の育成、さらには個人の身体を国家に従属させる教育へと政府主導のもとで変容していったという点が興味深かった。メキシコの同時期においても、工業化や都市化が進み貧困や犯罪の増加などの社会問題が拡大するなか、欧米諸国を志向して近代化を急ぐ政府が、それまでカトリック教会や篤志家など民間中心におこなわれてきた救貧などの慈善事業に介入し、国家主導の福祉事業へと転換しようとする試みを続けてきた。その試みのひとつとして、たとえば、孤児や貧困家庭に生まれた子ども、非行行為のあった子どもなどを収容する施設においては、読み書きなどの基礎的な教育の加え、木工や印刷、靴作りや縫製などの職業訓練がおこなわれていた。清朝末期の救貧事業と同様、メキシコの支配層は、貧困による治安の悪化と社会の衰退を懸念し、救貧事業による社会秩序の維持と貧困者の職業訓練を通じた労働者の育成を図ったのである。

こうしたメキシコの歴史を念頭において村田報告を拝聴しながら、国家主導による救貧事業を通じた「教化」にはどのような問題がはらまれているのかという点について考えさせられた。村田報告の意義は、清末福祉政策との関連で「国家」を考えることであるとコメンテイタの山田氏は指摘したが、欧米列強と対峙するなかで、同時期に革命（メキシコは1910年）を経験した中国とメキシコの両国の福祉政策史あるいは社会事業史の比較研究は、「国家」というものの性格をより多角的に考える視座を提供してくれるように思われる。

2つの報告は「ナショナリズム部会」のセッションとしておこなわれたが、時間の関係もあって、その2つを関連させて議論するところまではいたらなかった。わたしは、メキシコの先住民教育の歴史から、いわゆる「恵まれない」子どもたちの保護と矯正の歴史へと問題関心を移してきた。そのため、それぞれの報告は大変興味深く、多くのことを学ぶことができたが、ナショナリズムという観点から、植民地教育と貧困救済あるいは教化という問題にはどのような接点があるのかというような議論の展開があつたら、なお興味深いものになったように思われる。たとえ

ば、多言語多文化社会に生きる人びと、貧困のなかで生きる人びとのなかで、「国民」として選ばれたのは誰か、逆に選ばれなかったのは誰か。選ばれたものはどのような「国民」となることが求められ、そしてどのようなかたちで（教育なのか教化なのか）「国民」とされたのか、選ばれなかったものはどのような生活を余儀なくされたのか、ありきたりの表現ではあるが包摂と排除のしくみが、人種、民族、階層（性差、障がい、犯罪…）そのほか、さまざまな軸をめぐってどのように働いていたのか、そのもとで人びとはどのように生きていたのかなど、検討すべき課題はまだ多く残されているだろう。

本年度の春期例会の第1部は、そうした多くの問題を考える機会を与えてくれた有意義なセッションであった。

## 第2部 大門正克氏の講演

「私の研究を振り返る—自問と同時代史的な検証を通して—」に参加して

亀口まか（龍谷大学）

比較教育社会史研究会 2019年春期例会プログラム第2部では、大門正克氏の講演「私の研究を振り返る—自問と同時代史的な検証を通して—」が行われた。司会の岩下誠氏による研究会の案内文にあった「大門先生のご研究の方法や対象は本会だけではなく、最近の教育史研究の動向とも響き合っているように思われます」という呼びかけに興味をひかれて参加した。ここでは、講演概要と質疑応答の内容を簡単に記した後に参加者の一人として考えたことを述べてみたい。

大門氏の講演は、1970年代末から現在に至る長きにわたる自身の研究人生を3期に区分し、同時代史の視点と現在の視点という2つの検証から振り返るというものであった。この2つの視点からの検証を行う理由として氏が強調するのは、「過去を振り返る自問が現在からの視点のみになってはいけない」ということであり、記憶に頼らずに自分自身の文章や関連する文献を再読することで同時代史の視点をできるだけ得る努力をすることであった。

大門氏は、1970年代末から1990年代前半の第1期は、経済史研究から出発し、農村運動の研究に関心を広げていき、地域を対象に国家と社会の関連を把握しようとした時期であり、そのような第1期の検証は同時代史的視点からも現在からの視点からも重なるものであると整理した。一方、1990年代後半から2000年代前半の第2期は、農村社会の研究から農民家族の研究に向かう時期であったが、この時期と続く2000年代後半からの第3期である「生存」の歴史学とのつながりが、これまでうまく整理できてこなかったとして、あらためて同時代史的検証と現在からの検証がなされた。第2期は、阪神・淡路大震災と歴史の中の生と死の問題をめぐる模索、大門氏が直面した学童クラブ移転問題という現在の問いに歴史のなかの主体の考察を重ねるといった試みなどを通じて、第1期にはなかった「経験」という視座から歴史を問う取り組みであったこと、また、それは反芻・更新の思考過程であったことが提示された。大門氏は、第2期の「身体感覚」を「日常世界をうろうろしながら根拠地を探る過程」であったと説明し、こうした数値、定量の問題ではなく、定性的な考察の試みの鍵となるのがプロセス、文脈であり、そうした「根拠地」の探究は新自由主義に抗する道でもあったと検証した。続く2000年代後半から現在に至る第3期は、「生存」の歴史学を提起した時期であり、生存＝労働と生活、「生存」する側の視点、「身体的」視点から大きな歴史と個人の経験の接点、時間軸に移動・空間を含めて考えることで歴史をとらえ返す方法を提示した時期であると整理した。

大門氏は、前の10年、すなわち第2期の同時代史的位置づけが十分に位置づけられなかったとしたうえで、今回の検証を通じて『民衆の教育経験』の位置づけが不十分であったことを発見したと指摘した。同時代的には試行錯誤をしていたために、リアルでは見えていなかったこと、位置づけられなかったことが見えたこと、つまり、第2期の「経験」の視点から第3期の「生存」の視点へという文脈を発見したことにより、大門氏は、反芻・更新の思考過程という思考方



法、「経験」と「生存」の「統合論的アプローチ」という研究視座によって、国家と社会の関連で歴史を把握する研究方法を提示してみせた。

大門氏の報告後、小林氏、三時氏からコメント、フロアから質問、意見が寄せられた。ここでは、それらの内容をふまえ、私自身の関心に沿って考えたことをごく簡単に記しておきたい。

まず1点目は、子どもの側から「生存」の仕組みを考えるということについてである。小林氏からは、小林氏自身の〈不登校〉の歴史と学校建築史とを「生存」の視点でつなげるという研究を通じて、近現代の日本の学校が子どもの「生存」をめぐる、脅かす／守るという両義性の中で揺らぎ続けてきたと整理できるのではないかという論点が示された。それに対して大門氏は、学校と子どもの「生存」の関係を問い直す重要性を受けとめつつ、一方で、学校をつねに影響を与える側に置くのではなく、人々、とりわけ子どもの側からも「生存」の仕組みを考えるというように、相互関係を検討する必要があると応答した。一方で子どもの側からの「生存」の仕組みを考えると、学校との相互関係だけではなく、家族、社会福祉との関係もまた検討の俎上にのせていく必要がある。子どもの側が誰とのどのような関係における教育を経験したのかを学校経験を越えて問うことの重要性を考えた。

2点目は、そもそも「生存」の視点から歴史をとらえ返すことの意味についてである。「生存」の視点からの歴史的考察が内包する困難は、三時氏もまた「両義性」というワードを提示しつつ、しかし小林氏とは違うアプローチとして、そもそも「生存」に内包される両義性を指摘した。三時氏は、「生存」の視点から歴史をとらえ返すなかでみえてくる2つの両義性、すなわち「生存」の仕組みに関する「促進」と「障壁」、誰の「生存」を問題にするのかによって、「生存」構造自体が転換してしまうことをどう受け止めるのかという問いを提示し、さらには、そうした「生存」の両義性、重層性があるなかで、誰かに寄り添い歴史を書くことは可能なのかと投げかけた。大門氏は、歴史家が何らかの形で制約を及ぼすことが含まれていると考えざるを得ないが、その自覚をもってどう取り組むか、たとえば聞き手の役割として、聞くことの中に暴力や負担を与えることがあり、そうした聞き手の側が試されていると自覚しつつ、対象との関係、つながりのなかで取り組むほかないのでないかと応じた。こうした聞き手の姿勢こそが大門氏が考える歴史家の役割であると受け止められる。そうした姿勢は、大門氏によって丁寧に示された同時代史の状況と現在の視点の組み合わせから自分の研究を振り返る作業なしに体得されることはないと理解できる。その一方でそうした歴史家の自覚が少しまぶしくも思われ、語り手や資料など対象の側の矛盾や葛藤が取り残されはしないかと感じた。このことは、フロアから、「生存」は生きているとたまってしもうもの、たとえばお金、地位、名誉が生存でもあるのではないか、語られなかったことをどう考えればいいのかという問いと重なるものである。語り手や資料に向き合い続けることは、とらえたことととらえ損ねたことをともに発見する作業が必要なのではないか。大門氏がすすめる「自己解剖」から考えてみようと思う。

これまで一読者として比較教育社会史研究会から刺激を受けてきたが、思いきって扉をたたいたら、2回目でこのような報告の機会をいただき、とても感謝している。この場を借りてお礼申しあげます。

## 2019年秋季例会報告

2018年11月16日(土)に九州大学大学院 人間環境学府 教育システム専攻 教育学調査・資料室にて、2019年秋季例会が開催されました。